

令和6年度 第82回冬休み良書推薦運動

読書感想文コンクール

【表彰式

令和7年3月1日(土)
会場 サンセール盛岡

】

主催
協賛
後援

岩手県良書推進協議会
岩手県学校生活協同組合
岩手県小学校校長会
岩手県学校図書館協議会
岩手県PTA連合会

「本との素晴らしい出逢いと読書の力」

一般社団法人岩手県PTA連合会

会長 山下 泰 幸

岩手県良書推進協議会主催による令和六年度第八十二回冬休み読書感想文コンクールに応募していただき、見事受賞された皆さま、本当におめでとうございます。

さて、今日は「本との出逢いや読書」についてお話ししたいと思います。本というのは、ただの紙とインクではなく、本の中にはたくさんの知識や冒険、感動が詰まっています。本を読むということは、登場人物になりきって新しい世界を旅するようなものです。

皆さんが初めて本を手にとったときのことを覚えていますか？その本の中には、いろいろな冒険が待っていましたね。勇気を出して冒険に挑むヒーローや、不思議な生き物たち、そして知恵や勇気を教えてくれる物語がたくさん詰まっていたことでしょう。

読書は、ただ楽しいだけでなく、私たちにたくさんのお話を教えてくれます。本を読むことで、新しいことを知り、言葉を知ること、表現力が豊かになり、登場人物になりきるにより、様々な人の気持ちを理解する力が養われ、コミュニケーション能力がつかま

す。さらに、長い文章を読んでいるときは集中していますので、どんどん集中力と忍耐力が付き、創造力を働かせて読むことにより頭を使うので、頭の回転が良くなり、学力が上がります。どんどんアイデアが湧いてくるようになります。

こんなふうに、本を読むことでいろいろな力がつきます。読書って良いこと尽くめですね。

皆さんの本に親しむ日々の積み重ねが、大きな成長に繋がります。素晴らしい感想文を生み出し、今日の受賞に繋がりました。本日ここにいらつしやる受賞者の皆さんは、本との出逢いや読書をとっても大切にしていることでしょう。その素晴らしい姿勢を持ち続けて、これから本に親しみ、たくさんのお話を吸収し続けることを、心から応援しています。

最後になりますが、これから本を読んで、たくさん成長した皆さんの未来の活躍を楽しみにしています。そして、皆さんの読書を通じて得た新しい知識や経験が、これからの人生にも大いに役立つことを願っています。

これからも、たくさんのお話を大切にして読書の旅を楽しんでください。ね。

令和6年度 第82回

冬休み良書推薦運動読書感想文コンクール

入賞者名簿

『は図書名

〈最優秀賞〉

ともだちのわけ

『ほんとにともだち?』

盛岡市立仙北小学校 一年 高橋 凜

自分らしく生きること

『だがし屋のおっちゃんはおばちゃんなのか?』

花巻市立矢沢小学校 二年 川村 葵 緒

何にでもチャレンジ

『学級委員は負けない』

岩手大学教育学部附属小学校三年 高屋 葵

君は「時感」をどう使うか

『みんなそれぞれ心の時間』

盛岡市立城南小学校 四年 永井 瑛 人

配慮で広がる世界

『みおちゃんも猫好きだよね?』

盛岡市立上田小学校 五年 土井 尻 千 紗

誰かを支える「ヘルプマーク」 『みおちゃんも猫好きだよね?』

大船渡市立猪川小学校 六年 今野 紗 希

〈岩手県小学校長会長賞〉

にが手なことをがんばれるわたし『ひみつのとつくん』

北上市立黒沢尻東小学校 二年 浅見 朋 花

心の時間に目を向ける

『みんなそれぞれ心の時間』

花巻市立大迫小学校 四年 松坂 優 凜

みんながトクベツ

『トクベツキューカ、はじめました!』

宮古市立千徳小学校 五年 工藤 侑 矢

〈岩手県学校図書館協議会長賞〉

さかのうえのねこ

『さかのうえのねこ』

宮古市立山口小学校 一年 三上 晴

身近にあった深海魚

『釣って食べて調べる 深海魚』

盛岡市立河北小学校 三年 三田地 蒼 梧

トクベツキューカの教え

『トクベツキューカ、はじめました!』

盛岡市立城南小学校 六年 桐田 景 護

〈岩手県PTA連合会長賞〉

オレンジいろのころ、見つけたよ

『たいふうこぐま』

花巻市立大迫小学校

一年 松坂天佑

自分が相手のためにできること 『ルルとララのかみかみグミ』

奥州市立常盤小学校

三年 高橋心夏

イマジンく想像するということ 『ジョン』

宮古市立山口小学校

五年 箱石好南

〈優秀賞〉

やさしくしてもらえてよかったね 『たいふうこぐま』

宮古市立宮古小学校

一年 佐々木彩葉

しっぱいはせいこうのもと?かも

『となりのじいちゃんかんさつにつき』

宮古市立磯鶏小学校

二年 米澤明良

心の時間の感じ方

『みんなそれぞれ心の時間』

盛岡市立山岸小学校

三年 矢羽々幸星

ふさわしいリーダー?

『学級委員は負けない』

北上市立黒沢尻東小学校

四年 青木創志朗

前へ

盛岡市立山岸小学校

五年 小森結実

『もしもわたしがあのこなら』

〈入選〉

ほんとうのともだちって？ 『ほんとにともだち？』

一戸町立奥中山小学校 一年 猪 又 星 希

いのちをおしえてくれる火のとり 『火の鳥いのちの物語』

滝沢市立篠木小学校 一年 細 谷 栞

「マリンブルーのぼうけん」を読んで

『にじいろフェアリーしずくちゃん9マリンブルーのぼうけん』

北上市立黒沢尻北小学校 二年 東 千 織

「ぼくの犬スーズン」を読んで 『ぼくの犬スーズン』

盛岡市立太田東小学校 三年 津 金 英之介

私だって負けない 『学級委員は負けない』

花巻市立八幡小学校 四年 菅 原 桜 子

優ちゃんとゆかりが教えてくれたこと

『風になった優ちゃんと学校給食』

矢巾町立煙山小学校 五年 矢 吹 英 翔

ヘルプマークって何のため？ 『みおちゃんも猫好きだよね？』

盛岡市立向中野小学校 五年 武 田 葉 里

〈学校賞〉

盛岡市立城南小学校

〈学級賞〉

該当なし

〈佳作〉

二人ともだいじなおひめさま 『さかのうえのねこ』

奥州市立江刺ひがし小学校一年 躑躅森 じゆな

ひみつのとつくん

『ひみつのとつくん』

盛岡市立山岸小学校 一年 矢羽々 優結星

「特別な校則」

『トクベツキューカ、はじめました！』

平泉町立長島小学校 五年 千葉 愛美

風になった優ちゃんと学校給食を読んで

『風になった優ちゃんと学校給食』

盛岡市立青山小学校 五年 夏井 友都

私のハーフソウル

『旅する妖精たち』

陸前高田市立気仙小学校 六年 河野 陽菜

ともだちのわけ

盛岡市立仙北小学校 一年

たかはし りん

「ほんとにともだち？」ってどんなことかな。わたしにもともだちがいるけど、ともだちってなんだろう。くわしくしりたいな。そうおもって、わたしはこの本をよみはじめました。

くまのまあくんときつねのたんくんは、いっしょにあそんでいても、しゃべったりわらったりしません。くまのまあくんは、ほんとにともだちなのかしんぱいになりました。わたしのともだちは、いつもとなりにいてくれて、わたしにやさしくしてくれるげん気な子です。もし、わたしもおなじようにされたら、ほんとにともだちかまようかもしれません。

でも、あまりしゃべらないたんくんが、まあくんのためにおし花のしおりをいっしょうけんめいつくって、プレゼントしたのです。それをもらったまあくんはとてもうれいきもちになったばめんをよんで、二人はほんとうにともだちだとわかりました。このばめんは、わたしがこのおはなしで一ばんすきなところです。

わたしも、おともだちのためにうさぎのえ本を手づくり

して、プレゼントしたことがあります。ともだちが、わたしのつくったえ本をほしいといったので、うれしくなつてがんばってつくりました。できあがって、え本をわたしたとき、ともだちはとてもよろこんでくれて、二人でえがおになりました。

ともだちのわけは、あい手のことをかんがえて、なにかをしてあげたりやさしくしてあげたりすることだとおもいます。わたしは、ともだちのことを、ほんとうにともだちなのかとおもったことはありませんでしたが、この本をよんで、いろいろなともだちがいることをしりました。わたしも、ともだちとなかよくして、まあくとたんくんのように、あいてのことをよくかんがえて、いっしょにたのしくあそびたいです。

(図書名『ほんとにともだち?』)

(講評)

凜さんはこの本と出合つて友だちについてよく考えたようですね。いつもとなりにいてくれる凜さんの友だちと本の中の友だちはちがつていました。

それでも、しおりをプレゼントする場面を、自分の体験と重ねて、友だちとの関わり方はいろいろあることに気付いていきます。凜さんが、友だちについて考えていく様子がとても良く表れている文章でした。

この本を読んだ凜さんには、いろいろな関わり方の友だちができて、そうですね。

自分らしく生きること

花巻市立矢沢小学校 二年

川村 葵 緒

わたしは、「だがし屋のおっちゃんはおばちゃんなのか？」という本を読みました。本のタイトルを見たときにもおもしろそうと思ったのと、さいごには男か女かどちらなのか知りたくなって、この本をえらびました。

この本は、いつも行くだがし屋のおっちゃんが「はるこちゃん」とよばれるところを目げきしたほくが、友達のみさちゃんとしんそうをたしかめに行くお話です。

わたしは、さいしょに読んだときに女の子で生まれてきた人でも「男になりたい」と思う人がいることをはじめて知りました。おっちゃんが思いきって「わたし男になりたいねん」と言った場めんを読んで、心の中では家ぞくや友達にきらわれるかもしれないとドキドキしているのに、言おうと決めたことがゆう気があるなあと思いました。

ほくとまきちゃんがケンカをする場めんを読んだとき、わたしも同じようなことがあつたなと思ひ出しました。それは、かみの毛をバツサリときつたときです。スポーツをするときにじゃまにならないようにときりました。学校へ行くと、「男みたいになつたな」と言われてしまいました。

自分ではとても気に入っていたのにかみをみじかくしただけで男と言われてびっくりしました。だけど、自分も男の子に「男なんだから先に行つてよ。」と言つたことがあることに気がつきました。

この本の中でおっちゃんが、男だから女だからとかではなくて自分らしく生きることが大切だと言つていました。わたしは、女の子で生まれてきた人も自分らしく男の子の心をもつていいことを学びました。とくいなことやにがてなことは男も女もかんけないのだから、自分も「男だから」「女だから」と考えるのはやめようと思ひます。これからもわたしは、かみはみじかくするし、サッカーや虫とりも一生けんめい楽しみます。

〔図書名〕だがし屋のおっちゃんはおばちゃんなのか？

〈講評〉

この本はジェンダーについて書かれています。少し難しいテーマだなと思ひながら選んだ本でした。でも、「男みたい」「男だから」と言われたり言つたりした二年生らしい体験と重ねることで、難しい印象のあるテーマが、一気に身近な問題になりました。

最後の文章は、元氣いっぱい葵緒さんが、周りの反応に振り回されることなく自分らしく生きていこうという決意表明のようです。葵緒さんの心の成長が伝わる素晴らしい文章でした。

何にでもチャレンジ

岩手大学教育学部附属小学校 三年

高屋 葵

「一体、何に負けないのだろう」二年生の時に学年委員を経験した私は、「学級委員は負けない」という本の題名を見て、そう不思議に思っ読み始めました。

主人公のシヨウタは四年一組の学級委員です。いつもクールでボーカルフュイス、成せきゆうしゆうなシヨウタですが、ある日とつぜん手紙がとどきます。その内容は、

「おまえは学級委員にふさわしくない」

「はやくクラスいいをやめろ」

といったように、シヨウタに学級委員をやめさせようとするものでした。友だちのだれかがそんな手紙を自分に書いたことにショックをうけたシヨウタですが、はげましてくれる友だちに助けられながら、クラスを一つにまとめようとします。たんにんの安藤先生のお別れ会のじゅんぴが始まると、勉強に関係ないことはお遊びだと言ってたん当の仕事をさぼるサトルや、クラスをまとめようとするシヨウタを「みんなにいうことをきかせるわけ？」とひはんするヨウスケとぶつかります。サトルとヨウスケが手紙のはん人だと知ったシヨウタは、「ただ、いっしょうけんめいやつて、がんばったって自分で自分にいえたらいいじゃないか」と自分に言いきかせ、学級委員の役目をはたし、お別れ会を成功させました。そんな強いシヨウタの姿を私は心からかつこいいなと思えました。

私は二年生の時に学年委員になり、クラスや学年をまとめるため、ルールを守ってもらうためのビンゴやきせつのイベントなど、色々

なき画をしました。特に二年生全体で行ったクリスマス会に向けては、業間や昼休みに何度も集まって丸ばつクイズの内容を考えたり、進行のじゅんぴをしたりしました。とても大変だったけれど、当日はみんなのよろこぶ顔を見て、とてもうれしい気持ちになりました。その一方で、学年委員になったことがきっかけで、周りの友だちから、「学年委員なのになんでおしゃべりしているの!」「学年委員だからもつとちゃんとしてよ」と言われたことがありました。確かに自分が悪かったなと思う時もあるけれど、「学年委員なのに」という言い方は「あなたは学年委員にふさわしくない」と言われているようで、とても悲しくなる時もありました。そのため、やりがいもあるけれど、それ以来、学年委員やリーダーに立こうほしなくなっていました。けれど、「だれかに何か言われたらどうしよう」「やってみて失ばいしたらどうしよう」と思っってしまう私をシヨウタははげましてくれているように思いました。シヨウタの言う通り、一生けん命やつて、自分でがんばったと思えたらいい、何もしていないのに、リーダーにふさわしいかどうかを気にするひつようもないのだと思えました。これからはやつてみたいと思ったら、自分の弱い気持ちに負けず、何にでもチャレンジしてみようと思います。

(図書名『学級委員は負けない』)

〈講評〉

学年委員を経験したことがある葵さんは、主人公シヨウタの言動や考え方に着目しながら自分と重ねて読むことができました。自分が体験した時に感じていた思いを振り返ることで、前向きなシヨウタの考え方が葵さんの心にどのよう響いたのかがよく伝わってきます。さらに、疑問から始まる書き出しとまとめがつながる書き方も上手です。シヨウタの言葉に励まされ、前進しようとする葵さんの成長が感じられます。

四年 最優秀賞

君は「時感」をどう使うか

盛岡市立城南小学校 四年

永井 瑛人

「時間とは何か、考えてみたことはありませんか？」という筆者の問いかけに対する答えは、「ノー。」だ。そこで、三年生で習った算数の学習を手がかりに考えてみた。時こくはそのしゅん間を表すもの、デジタル表示されている時こくのイメージだ。一方時間は、ある時からある時までの間の長さだと字から想ぞうできる。休み時間、そうじ時間、じゅ業時間。始まりがあつて終わりがある。

筆者は、その時間の感じ方は、人それぞれであると書いている。本当かどうか、自分のけいけんを思い出してみた。たしかに、友達と大盛り上がりするドッジボールは、あつという間で実さいの時間より短く感じる。二十分という休み時間は、「もう二十分たつてしまったのか。」という思いになる。ぎやくに、冬休みの宿題で「一日八十分以上勉強しましょう。」という指定があるのだが、勉強しても勉強しても「まだ二十分なのか。」という思いがあふれてくる。同じ二十分だが、「もう」と「まだ」のちがいのように、自分自身にべつの時間が流れているのかなと感じた。そこでふと思つたことがある。「時間」は「時感」なのではないかということだ。

二学期の図工で「作つて、使つて、楽しんで」という学習をした。それは、木の板をのこぎりで自由に切り、それらを組み合わせせて何かを生み出す学習だ。切ることは簡単にできたのだが、何かに見立てることになやんでしまったせいで、たいくつだと感じた。そして、その時間はとても長く感じた。しかし、「何かを生み出さないといけない。」ではなく、「自由に生み出していい時間なんだ。」に気持

ちを切りかえてみた。すると、いつの間にか楽しい時間に切りかわつて、作業がどんどん進み、「もうこんな時間なのか。」に変わつていった。考え方や感じ方を変えることで、時間の進み方が変わるのだと気がついた。だから、やはり「時間」は「時感」だと思う。

感じ方によって、時間の長さのとらえ方が変わる。同じ時間をすごすなら、「楽しい」と感じ、「あつ」という間だつた。」というじゅう実した時間を積み重ねていきたい。だからものの感じ方や考え方が大切になつてくるのではないかと、この本は、そう気づかせてくれた。

筆者は最後に「君にとっての時間とは何か？」それは「君の生き方そのものだ」と書いている。ほくはその言葉をもらつて、もう一度よく考えてみた。「時間」とは、生まれてから死ぬまでの時の長さだ。今のほくは、先祖代々受けつがれてきた命のバトンを受け取つている。だから、せいっぱい生きていく。これから先、自分の苦手なことやまだ取り組んだことのないものに出合ふと思う。けれど、ほくはこの大切な時間を、自分で「楽しい」と感じられるように、物事に向き合い、考え、過ごしていきます。

(図書名『みんなそれぞれ心の時間』)

〈講評〉

筆者の問いかけに対して「ノー。」と答えた書き出しから、今後の決意を述べたまどめで読みごたえがあります。感想や考えをしつかりもち、文章の組み立てや言葉の使い方など、表現のしかたまでよく考えて書くことができました。筆者の考えから、さらに一歩進めた「時感」という言葉も瑛人さんの体験をもとにした説得力のあるもので見事です。読書を通して、考えを深めたことが伝わってくる感想文です。

五年 最優秀賞

配慮で広がる世界

盛岡市立上田小学校 五年

土井尻 千紗

「配慮」とは、相手のことを思いやって行動すること。これは、この本を読み、私が考えついた「配慮」の意味だ。私も最初は朱梨と同じように、辞典で調べた。のっていた意味は、心を配ること、心づかい。朱梨が調べて出てきた意味と同じだった。私はこの意味がしっくりこなかった。

この本には、様々な配慮が出てきた。みおちゃんの配慮。自分の誕生日パーティーが開かれる「ミネット」には、猫が三匹いる。その場の空気を読み、猫アレルギーにもかかわらず入ったこと。志倉さんの配慮。自分が経験してつらかったことが、他の子におこらないように、「みんないっしょが正しい」と考えたこと。茉希ちゃんの配慮。茉希ちゃんには色弱の弟がいる。同じ色弱の悠太がかわいそうだとわかっていて、上から目線な感じがして、志倉さんに怒ったこと。

人それぞれの配慮の仕方がある。心を配ったつもりが相手にとっていやなこともある。志倉さんと茉希ちゃんのように。立場を変えてみると、自分にとって、いやだなと思った行動でも、相手は心を配っていることもある。配慮というものの難しさを感じた。

また、人それぞれしてもらいたい配慮があることが分かった。その配慮をもらうためには、周りの人たちに伝えて、理解してもらうことが大切だと思った。人への伝え方は、様々だ。みおちゃんのように、自分で伝える方法。かなり勇気がいるが、分かってくれている人がいると心強い。自分の気持ちも伝えられる。悠太くんの

ように、誰か理解してくれている人から、みんなに伝えてもらう方法もある。ニコアスのフードコートでぶつかった女の人や、ミネットの音子さんのように、耳マークや、ヘルプマークを使って伝える方法もある。

人にはそれぞれ事情がある。アレルギーや、色弱や、病気というような事情だけでなく、みんなそれぞれがちがうことを知っているだけでも、自分ができることが変わってくるかもしれない。朱梨がいきついた考えに私も共感した。

本を読み返した時に、気づいたことがあった。この本は、多くの人に分かりやすく、読みやすいように「ユニバーサルデザインフォント」が使用されているということだ。それを知った時、私が四年生の時に「ユニバーサルデザイン」について学習したことを思い出した。誰もが利用しやすくなっているものとのこと。その時私は、身の回りにたくさんユニバーサルデザインがあることに気づいた。この本も、そのように作られていることを知り、改めてこの本に出合えてよかったと思う。

ユニバーサルデザインのように、私は誰にでも思いやりをもった行動をしたい。そんな自分でいられたら、世界が広がるかもしれない。朱梨のように。

（図書名「みおちゃんも猫好きだよね？」）

〈講評〉

私たちの周りにいる様々な人のことを思いながら行動することは、学校で学習したユニバーサルデザインの考え方にもつながりますね。

じっくりと本と向き合い読み進めたことで、辞典に載っていた「配慮」の意味を超えて、自分なりの解釈をすることができた千紗さん。皆が違うからこそ、「配慮」の仕方や方法も変わってくるのだと思います。主人公の考え方に共感した素直な思いから、これからの自分の行動や考え方をさらに深めることができていました。

誰かを支える「ヘルプマーク」

大船渡市立猪川小学校 六年

今野 紗 希

この本は、外から見ただけでは分からない病気や、その病気をもっている人達のためのマークについて考えさせられるお話です。

私は、そのマークについて興味をもったのでこの本を読んでもみました。

主人公の朱梨は、自分の意見をしっかりと伝えられない内気な女の子で、私も朱梨と同じような性格なので「似ているな。」と思いました。だけど「伝えないと相手がわからないこともある。」と朱梨は気づき、伝えなかったことを話すことができました。私は、そんな朱梨がとてもすごいなと思いました。私は、積極的に相手に話すことの大切さがこの本を読んでから分かったのでこれからは自分の意見も伝えてみたいなと思いました。

さらに、この本を読んでから「支え合い」や「配慮」が必要なことも分かりました。朱梨の友達になった転校生のみおは、猫アレルギーで、みんなにはそのことをひみつにしていました。すると、みおの友達の女子が勝手に猫のいる雑貨店でみおの誕生日会を開くと決めてしまいます。私は、「勝手に決めるのはよくないな。」と思いました。誕生日会の日、みおは猫アレルギーのことをみんなに話して、店の中ではなく、庭でパーティーをすることになりました。私は、誕生日会について勝手に場所を決めた女子も喜んでもらおうとして決めたと思うし、悪気はなかったと思うから、しっかりと話し合えばいいんだなと思いました。みおも猫アレルギーのことを話すのは、とても不安だったと思うけど、話したことでみんなが楽しめた

から勇気を出せてよかったなと思いました。

この世界の中にはいろいろな病気があり、みおのようにアレルギーをもつ人もいます。病気をもっている人のために、ヘルプマークを探して、調べている場面を見て「すごいな。」と思いました。私は、ヘルプマークなどのマークは身近でたまに見ることがあります。ですが、ネットで調べてみると、見たことの無いものも多くて種類もたくさんありました。まだ知らないことが多いということが分かったので、朱梨やみおのように色々な場所に行つて調べてみたいと思いました。そして、朱梨とみおがお店で探していたピクトグラムはどこの国の人でも、日本人でもなくても分かる世界共通のマークだということが分かりました。ピクトグラムは学校でも病院でも色々なところで見かけます。さらに、オリンピックなどでも見たことがあり、世界の色々な人がすぐ分かるようになってとてもすごいなと思いました。

私はこの本を読んで、色々な人のためのマークについてよく分かりました。もし困っている人がいたら、前は助けることができないでいたと思うけど、この本のことを思い出して、少しでも役に立つように協力したいです。

(図書名「みおちゃんも猫好きだよね?」)

〈講評〉

私たちの身の回りにある様々なマークには誰かを助けるための意味があり、その大切さに改めて気付くことができたのです。本を読み、インターネットでも調べ、さらに色々な場所に行つて調べてみたいと思つた紗希さんの前向きな気持ちに素晴らしいなと思いました。

本を読む前は、朱梨と同じような内気な性格だったという紗希さんも、これからは、自分の気持ちや意見を伝えられるような自信をつけることができましたね。

岩手県小学校長会長賞（低学年）

にが手なことをがんばれるわたし

北上市立黒沢尻東小学校 二年

浅見 朋花

「うわあ、わたしと同じ子がいた。」

わたしとそうすけくんは、体いくがにが手なところが、ちよつとにしています。そうすけくんは、とくにさが上がり
がにが手でした。わたしも、さか上がりができなくて、先
生に手つだつてもらわないとできません。またさか上がり
ができなかつたなあとおちこむ時があるけど、できないの
は、わたしだけじゃないからいいやと思っていました。

でも、本を読んでいるうちに、わたしの考えが少しずつ
かわっていきました。わたしも体いくはにが手だけど、で
もきらいではないです。何できらいではないのかと思つた
ときに、友だちと楽しく体いくをしている自分のことが頭
にかんだからです。

そうすけくんは、ひとりでさか上がりができるようにな
りたいと心にきめて、だん地の公園でさか上りの練習を
はじめました。練習していると、ぶきみな音が聞こえてき
て、何でもとくいだと思つていたぐっちゃんが、けんばんハ
ーモニカの練習をしていました。あと、ゆいちゃんもじつは
バトンがにが手だとわかりました。そうすけくんは、自分

だけではなくて、みんなにもにが手なことがあると気づき
ました。三人は、にが手なことはべつべつだけど、いっしょ
に練習したり、おうえんし合ったりして、にが手なことを
楽しさにかえていきました。

わたしは、できないことをがんばろうとする自分の強い
気もちが大じだと思つたし、できないことを、いっしょに
がんばれる友だちがいることも大じだと思いました。そう
すけくんたちのように、みんなががんばれば、にが手なこ
とがすきになることがわかりました。

やっぱりわたしは体いくはにが手だけど、そうすけくん
たちのように「ひみつのとつくん」を、友だちといっしょ
に楽しめるわたしでいたいです。

（図書名「ひみつのとつくん」）

〈講評〉

まず、書き出しの工夫がよいです。主人公と自分が似ていると共
感しながら読み始めたのもいいですね。

主人公達の秘密の特訓の良さを「苦手なことを楽しさにかえて
いった」と表したところ、朋花さん自身も「苦手を友達と一緒に楽
しめる私でいたい」とまとめているところは、この話にびつたりな
感想だと思えます。読んでいて笑顔になりました。

この本を通して、「にがてなことをがんばれる朋花さん」になっ
ていったのでしょね。

心の時間に目を向ける

花巻市立大迫小学校 四年

松坂 優 凛

みなさんは時間の使い方について考えたことがあるだろうか。私はこの本を読むまで全く考えた事がなかった。なぜなら、この本でいう「時計の時間」でいつも行動していたからだ。決められた時間に起きて、学校に行く。学校でも決められた時間の通りに行動をする。家に帰ってきてても習い事やスポーツの時間に合わせて動く。決められた時間に動く事が当たり前になっていて、時間の使い方や大切さについて考えるという発想がそもそもなかった。

自分にとって大事な時間は、どんな時間だろうか。友達と遊ぶ時間、母が每ばんしてくれる読み聞かせの時間。母には時間をもったいないと言われるけれど、ボーっとする事も私にとっては頭をリフレッシュするとても大事な時間だ。きつと母は早いリズムが心地良くて、私はゆっくりのリズムが心地良いのだろう。本に書いてあった目をつぶって、手で十のリズムをとる実験を母とやってみても、私の方がやはりゆっくりだった。人それぞれ心地の良い時間とリズムがあるのだと知った。「時計の時間」のように、みんなに合わせる事が必要な時ももちろんあるが、そうでない時は自分の心の時間をじっくり実させたい。

まだ十才の私は、時間は無げんにあるような気がしていた。でも、その時間はかぎりあるものだを知った。この前、テレビで阪神・あわじ大しん災の特集をやっているのを見た。かぎりある時間が明日で失われるかもしれないと思うと、なんだか少しこわいと思ったのと同時に、いつ自分が死ぬか分からないと考えると、自分が満足で

きるような時間をこれからはふやしていきたいとも感じた。わたしのおじいちゃんはお私がいちばん小さいころになくなった。数少ない私とおじいちゃんがいっしょに写る写真。どの写真もおじいちゃんは笑顔だ。おじいちゃんはこれまでの時間を幸せな時間だと思って死んでいったのだろうか。少ししかいっしょにすごした記憶はないけれど、幸せだったと思ってくれていけば、少しの記憶の時間も私の心の幸せな時間になると思う。

自分が満足できる時間の使い方考えられるのは自分だけだ。満足した心の時間をすごすためにはどうしたら良いか、考えさせられた。やりたい事を紙に書き出す。私は不器用で全部を完ぺきにこなす事は出来ないの、思い切つてやらない事も決める。自分一人ではむずかしい事は人にたよる。ボーっとする時間を大切にしているように、気持ちと体のオン・オフも必要。

人それぞれ心の時間をじっくり実させるための方法やリズムはちがう。生活していればじゅ業や楽しみを待っている時間等、たいくつな時間も絶対にある。百パーセント心の時間をじっくり実させることはできないが、私は私なりの方法で心温まる時間をこれからすこししていきたい。そして、この本を読んでもいないみんなにも心の時間の大切さを教えてあげたい。

（図書名「みんなそれぞれ心の時間」）

〈講評〉

これまで考えたことがなかった「時間の使い方」について、本を読み、じっくり考えることで「心の時間を大切にしたい。」という思いをもつことができたのですね。体験を振り返ったり、自分をよく見つめたりしながら文章を書くことで、優凛さん自身がどんどん感想を深めている印象を受けます。文章の組み立てもしっかりしていて、考えがよく伝わってきます。これからますます心の時間を充実させた素敵なおし方ができそうですね。

みんながトクベツ

宮古市立千徳小学校 五年

工藤 侑 矢

一年の中で一日だけ好きな日に学校を休んでもいい「トクベツ キューカ」。しかも、休む理由は先生にも両親にも言わなくてもよいというものだ。なんてうらやましい制度なのだろう。もし自分の学校にこの制度があつたら、ぼくは朝が苦手なので朝起きられなかつた時に使おうか、それとも友達と日にちを合わせて一日中思いっきり遊ぶのもいいなと、わくわくした気持ちでこの本を読み始めた。

この本の舞台になっている小学校には、そのトクベツキューカという制度がある。このトクベツキューカを苦手な雪の日や、クラスの友達と一緒に一日を過ごすために使った子、使わなくてもトクベツキューカがあることが心の支えになって、友達との学校生活がもつと楽しくなった子もいた。

ぼくはその中で、あまり登校していなくて月に一回ほどしか学校に行かない子の話が特に心に残った。

その子は、学校に行けていない自分が特別でいつも学校に行けているみんなが普通だと感じていて、やっぱりみんなみたいに普通にならないといけないのだろうと少し苦しく感じていた。ぼくも学校に行くのは当たり前だと思っていたし、それが普通と思っていた。でもぼくは担任の西方先生からの

「普通って、何だろうね」

という質問に少しドキッとした。ぼくは最初、みんなが当たり前にできていることが普通だと思っていた。

ぼくたち一人一人は、みんな違っている。好きなものや得意なもの、考え方や家の事情だって違う。体も心も環境も全く同じ人はい

ないからその中で普通が何かなんて決められないし、自分の中の普通が必ず他の人に当てはまるわけではない。人それぞれに普通があるのに、みんなと違うと普通ではなくて特別になってしまうなんてなんだかおかしい。ぼくは主人公と一緒に、それならますます普通って何なのかわからなくなってきたて頭を抱えた。答えが出せずにもやしている主人公とぼくに、西方先生が教えてくれた。

「こんなたくさんの子たちがいるんだから普通なんて、もともとないのかもね。みんな普通じゃなくて、みんな特別なんだと思うよ。」

その言葉を聞いてぼくはなんだか心が軽くなったような、心にストンと言葉が収まったような気持ちになった。ぼくたちみんなはそれぞれ違っていて、それぞれが特別でぼくも特別なんだと思うと、なんだか自信がわいてきたように感じた。そしてこの物語のトクベツキューカとはただの特別に休んでいい日というだけではなく、一人一人の特別を認めてくれる日なのではないかとも思った。もしそんな日があるなら、たとえ使わなくてもともうれしい心強い気がする。

今、ぼくの学校にはトクベツキューカはない。でも、特別を認めて自信をくれるトクベツキューカのように、人の特別を大事にしてあげられる人になりたいとぼくは思った。

（図書名「トクベツキューカ、はじめました！」）

〈講評〉

「普通」は、大人にとっても、難しい言葉です。侑矢さんも「普通」の意味を考え、悩みながらこの本を読み進めました。短い文や言い切りの文末表現を繰り返すことで、その様子がよく伝わってきます。

そして登場人物の言葉から、その意味がすつきりと心に下りた時、侑矢さんの世界がまた新たに開けたのだと思います。素直で実感を伴った言葉や表現の一つ一つが、感想文を読んだ人まで、とても清々しい気持ちさせてくれました。

さかのうえのねこ

宮古市立山口小学校 一年

三 上 晴

エステラは、ねこの名まえだ。さかの上のうちに、おとうさんと、おかあさんと、しあわせにくらしていた。ある日、おかあさんが、

「らいねんは、四人でお花見をしましょうね。」

「まっついていてね。」と、まっついてでかけて、なかなかかえらなかつた。

エステラはなんのことかわからなかつたけど、ぼくにはわかつたんだ。「赤ちゃんがうまれるんだな。」

ぼくが、こどもえんのときのこと。「みやこびょういんで、赤ちゃんをうんでくるからおりにしてまっついてね。」といつて、おかあさんはでかけた。ぼくは、ちよつといやだなどおもつた。でも、おとうさんと、じいじと、ばあばがいるからあんしんだとおもつた。だけど、さびしかつた。エステラは、なんにもしらなかつたから、ぼくよりもつとさびしかつたんだらうな。だから、おかあさんが、赤ちゃんをつれてかえつてきたとき、やきもちをやいて、いじわるをしたくなつたんだね。

でも、ぼくはちがつた。おとうさんとおかあさんが、こ

どもえんに、赤ちゃんをつれてぼくをむかえにきてくれたとき、とつてもうれしかつた。「だだいま。おりこうにしてた？この子、なぎつていうんだよ。はるのいもうとだよ。」ぼくを見ておかあさんはいつた。ぼくは、ちよつとなみだがつた。

いまなぎは、二さいはん。すぐなくけど、とつてもかわいくて、ぼくは大すきだ。ぼくは、なぎのおにいちゃんだから、いつもめんどうをみてあげてる。

エステラは、さいごは赤ちゃんをたすけてあげた。ぼくは、そこをよんだとき、ほつとした。

ぼくは、ずつとずつとなぎを見まもるよ。エステラもそうだよ。ずつとずつといいおねえちゃんできてね。

（図書名『さかのうえのねこ』）

〈講評〉

晴さんがお兄ちゃんになったときの体験とエステラの気持ちや行動を重ねて、しつかりと読んでいます。エステラを見守りアドバイスする文章を読むと晴さんがエステラのお兄さんようですね。お兄さんとして頑張ることのお手本を示しているようでした。「ずつとずつとみまもるよ。」という言葉にもお兄さんとしての決意が表れていました。常体で書かれていて、リズムのある文章になつていくことも、とても効果的ですね。

身近にあった深海魚

盛岡市立河北小学校 三年

三田地 蒼 梧

ぼくがこの本を読んだ理由は、深海魚に少しきょうみがあつたからです。ぼくの知っている深海魚はリュウグウノツカイやメンダコです。どちらの生き物もおもしろいふしぎな形をしています。体が細長くてきらきらしていたり、耳のようなヒレがあつて目が丸く大きかったりします。図かんやテレビで見るだけだと思つていた深海魚が、この本を読んでみると実は身近な魚だということが分かりました。しかも深海魚は食べられるそうです。ぼくは深海魚を食べるといふイメージが全くなかつたので、料理された深海魚のページを見た時はびっくりしてしまいました。

深海魚にもおいしい魚とおいしくない魚があります。おいしくない深海魚は海の中でしずまない様に泳ぐための水が、ぼくたちが食べる身の部分にたくわえられているからあじがいまいちになるそうです。そして、おいしい深海魚にも食べてはいけない魚があります。それはバラムツやアブラソコムツです。その魚を食べてしまうと、人間が消化できないあぶら成分のせいでおなかをこわしたり、消化不良なかつたあぶらが人間のおしりから出てきます。もしもぼくのおしりからバラムツのあぶらが出てくると思うと、そうぞうしたただけでゾツとしてしまいました。

深海魚に出会うためには市場に行く方ほうがあるそうです。ぼくも学校の社会科見学で、もりおか市中央おろし売り市場に行ったことがあります。せん魚やれいとう室があつてとても広い市場でした。マグロやブリ、カレイものこつていました。見学した時はカレイが

深海魚だと知らなかつたけれど、この本に書かれていたように市場に深海魚がならべられている所を見られたのでよかつたです。

この本を読んで知つたことがまだあります。それは深海が日本のおちこちにあるということでした。ぼくは深海はもつと遠くにあると思つていました。だから、する河わんの様に岸から数十分で深海にたどりつける所があるなんてすごいなと思いました。

深海魚の中にアカムツなどのどやおなか黒い魚がいます。どうして黒くなつているのかというと、アカムツの食べるエサがホタルイカなどの光を放つものが多いからだそうです。食べたエサが口やおなかの中で光ると外へすけてしまいます。深海は真つ暗で体の中で光つてしまうと他の魚に気づかれて食べられてしまいます。だから口やおなか黒くなつていて光をさえぎつていようです。ぼくはこの本を読む前は深海魚のどやおなか黒い魚にもしていませんでした。のどを黒くしたり、エラにとつきをつけたり色々な進化をしてきびしい深海を生きのびるところがすごいと思いました。

この本を読んで深海魚は意外と身近で生きる工夫がかつこい魚だと思ひました。今度スーパーでおいしい深海魚を買ひたいです。

（図書名『釣つて食べて調べる 深海魚』）

〈講評〉

深海魚について書かれている内容に引きつけられ、たくさんのことを知り、そして、伝えたいという蒼梧さんの思いが感じられます。「実は身近な魚である」といういちばんの驚きが内容ごとにまとめられて、とても分かりやすい文章です。深海魚の魅力や意外性を感じた蒼梧さんが、ワクワクしながら楽しんで読み進めている様子がかんてくるようです。自分びつたりの本と出合い、素敵な読書体験になりました。

トクベツキューカの教え

盛岡市立城南小学校 六年

桐田景護

ぼくがこの本の中で心に残った言葉があります。それは、「理由もないけど、心がどうしようもなく動かされるものが、本当に特別に好きなんだと思う。」という言葉です。なぜこの言葉が心に残ったかという、ぼくは五年生の夏からバスケットボールをしていいますが、練習も試合もとにかく楽しくて、本当に理由もなく、心が動かされるので、この言葉に共感しました。

また、ぼくがこの本を読んで面白いと感じ、共感したのは、トクベツキューカという校則を通して、新たな出会いや新たな考えが生まれていくところです。

一つ目は、主人公が知らない子と出会い、その子と話してみても友達になっていく場面です。

ぼくが二年生の頃、転校生がやって来た時に、勇気を出して話してみたら、とても面白くて、いっしょに話しているうちに友達になった事を思い出しました。

二つ目は、特別好きなものがないという主人公が、あまり話をしたことのない虫好きな人と話をしているうちに、虫が苦手だった主人公の中で、いつの間にか虫が特別な存在になっていったことです。ぼくも五年生までは特別好きなものがありませんでした。友達にさそわれて始めたバスケットボールがとても楽しくて、いつの間にか、ぼくにとってバスケットボールが特別な存在になっていました。三つ目は、親友の二人がトクベツキューカを使い自転車旅に出ます。旅を提案してきた友人は今学期で転校することが決まってい

て、旅の最後にその事を主人公に打ち明けます。普段は泣くことのない主人公と友人が二人で泣いている場面が心に残りました。

ぼくもバスケットボールの最後の県大会で負けた時、このチームで試合をするのが最後だと思うと、普段泣くことはないのに、自然と涙が流れてきてしまいました。

四つ目は、月に一度くらいしか学校に行けなかった子が、トクベツキューカの子に声をかけられ、友達になったことにより、以前よりも学校に行くようになるところです。

実はこのトクベツキューカの子は他の話の主人公で、その話で、すれちがった相手の視点から書かれているのもとても面白と感じました。

ぼくは、この「トクベツキューカ、はじめました」という本を読んだことよって、自分のこれまでの小学生生活をふり返って考えたり、自分が何が好きか改めて分かったり、出会いや別れによって、色んな考えが生まれたり、別の視点で見たり考えたりすることを学びました。このことを中学校生活に活かしていきたいです。

（図書名『トクベツキューカ、はじめました！』）

〈講評〉

主人公と自分を重ね合わせることで共感する気持ちが高まり、物語の世界にどんどん入り込んで読み進めたことが伝わってきます。六年生のこの時期だからこそ、小学校生活を振り返り、友達との関わりや自分の好きなことについて改めて考えるきっかけになったこの本との出会いは、景護さんにとってかけがえのないものでしたね。

これから進む中学校でも、新たな出会いや考えを大切に、景護さんらしく頑張ってください。

オレンジいろのこころ、見つけたよ

花巻市立大迫小学校 一年

松坂 天佑

ほくは、くまのプーさんが大すぎ。だから、ひょうしのくまのえがともかわいいところひかれたよ。なのに、たいふうこぐまってどういうことだろう。

よんでみると、そのりゆうがすぐにわかったよ。こぐまはあばれんぼうで、町の人をこまらせたり、わめきちらしたり、大さわぎ。まるで、ほくのようにだったよ。ほくは学校のじゅぎょうにみんなといっしょに出ることができない。だまってすわっていることががてで、たちあるいたり、おともだちにちよつかいをかけたり、ついついけんかになってしまったり。きつとみんなにめいわくをかけてばかり。だめだとわかつていのに、どうしてそうしてしまうのか、じぶんでもよくわからない。もしかしたら、こぐまもそうなのかな。かまってほしいだけ。すなおじゃないだけ。こまらせたいわけではないとおもうな。

もう一つ気になったところは、ミックさんがたいふうがくるところをおしえてくれたのに

「しるもんか！」

と、こぐまがいったところ。人になにをいわれても、や

りたいことはやる。ほんとうにこぐまはほくみたい。ほくもやりたいとおもったことはやらないと気がすまない。あぶないとちゆういされることはばかり。こぐまはたいふうでぼうしやバケツがとばされたり、うごけなくなったりしたけれど、ミックさんが見つけてたすけてくれる。こぐまは、おれいにさかなをプレゼントした。みんな、見て！こぐまのこころはまっくろではなかったよ。こころのおくにオレンジいろのぼかぼかのきもちがあったよ。ママは天佑のすなおでやさしいところがすきと喋ってくれる。ほくにはくろいこころしかないとおもっていたけれど、オレンジいろのぼかぼかしたこころもあるのかもしれない。おくそこにあるほくのオレンジいろのこころ、だいじにだいじにしたいな。

（図書名「たいふうこぐま」）

〈講評〉

たいふうこぐまの行動を通して自分の行動を振り返っています。だめだつて分かっていのにやってしまうたいふうこぐまと天佑さんは、同じことで困っているようでした。そして、感想文を書きながら一緒に心を成長させていく様子が分かります。オレンジ色で表した心の表現も素晴らしいです。

天佑さんも、たいふうこぐまと同じようにかくれているオレンジ色の心をついて見つけてくださいな。

自分が相手のためにできること

奥州市立常盤小学校 三年

高橋 心夏

わたしがこの本のシリーズと出会ったのは、学校の図書室でした。「たくさん人がいるけど、何だろう。」

気になって見に行くと、新しい本コーナーにルルとララの本がありました。さっそく手に取って読んでみると、ルルとララが作ったお菓子のほかで動物たちのかない気持ちやモヤモヤした気持ちを元気にするお話が書いてありました。どのシリーズも読んでいるうちに、わたしの気分が明るくなりました。

このお話では、ルルとララのお店にふた子のリスのチップとポップがお菓子の注文にやってきます。その注文は、空色でどうめいなお菓子。しっぱいしたゼリーからルルとララは、とてもかわいいグミを作ることをひらめきました。ルルとララのアイデアは、とてもすばらしいです。わたしもアイデアを考えることは、好きです。考えたアイデアを相手につたえると、わくわくします。だから、考えることが好きです。

お話にたくさんグミが出てきます。お気に入りには、いちごジャムのグミです。見た目は、花の形できせつを感じるのですができました。そして、あまくておいしそうに見えました。わたしもいつか作ってみたいです。

ルルとララが作ってくれたグミのおかげで、森の動物たちは元気を取りもどしました。ルルとララは、動物たち一びき一びきにゆう気をもってもらいたかったのかなと思いました。もし、わたしがルルとララの立場だったらなやみがある動物たちをお菓子でよろこば

せるだけではなく、「もう大じょうぶだよ」とはげまして元気をあてたいです。

このお話を読んでわたしは、いつも家族にえがおでいてほしいので、手紙や絵をかってプレゼントしたことを思い出しました。わたしは、絵や手紙をかくことが好きです。それをもらった家族は、よろこんでくれました。お母さんには、「いつもごはんを作ってくれて、ありがとう。」と書いて、絵もいっしょにかきました。お父さんには、「いつもせんたくをたたくんでくれて、ありがとう。」と書きました。お父さんは、わらってくれました。二人ともわたしたち後に、

「ありがとう。」

と言ってくれました。家族がよろこぶすがたを見て、わたしもうれしくなったので、リビングのかべにその手紙をはってもらいました。弟も同じように、手紙を書いてかべにはっていました。家族みんながうれしい気持ちになることができました。

ルルとララも森の動物たちによるこんでもらえてうれしかったのだろな。わたしはまだ、お菓子を一人で作れないけれど、いつかちようせんしてみたいです。そして、お菓子といっしょに手紙と絵をそえてプレゼントしたいです。これからもたくさんの方のえがおを見て、うれしい気持ちになりたいです。

（図書名『ルルとララのかみかみグミ』）

〈講評〉

家族にプレゼントをわたして喜んでもらった時の経験からルルとララの気持ち想像したり、自分だっただろうかと思うか考えたしながら感想をもつことができました。心夏さんがこのお話を読んで気分が明るくなったのは、ルルとララが動物たちにどんな思いをもってお菓子を作っているかがよく分かったからですね。ルルやララのように相手を思う気持ちをもちたいという心夏さんの優しさが伝わってくる感想文です。

イマジジン〜想像すること

宮古市立山口小学校 五年

箱石好南

いつか見たニュース番組の最後。海に向こうで起こった戦争の映像が流れ、そしてそのバックにはちよつとけだるそうな歌が添えられていた。その曲の題名は「イマジジン」といい、それを作曲し歌っているのはジョン・レノンという人だと母から教わった。

十歳のジョンは言う。「大人はいつもだめばかり。ほくのたつたひとつの願いごとだつてきいちゃくれない」と。これはどうしたことなのか。もう一度、ページをめくり直して考えてみる。

第一にミミ伯母さんの存在が大きく関係しているように思う。ミミ伯母さんはジョンの友達関係について、労働階級の家の子だからという理由で一緒に遊ぶことにいい顔をしない。もちろん、ジョンがいたずらをするに伯母さんが注意するのは私も当然のことだと思ふけれど、ジョンはそれも駄目と言われたことの一つに数えているだろう。ただ、私もジョンと同じように心を痛めた出来事がある。それは、彼が書いていた絵や詩が伯母さんによつて捨てられ燃やされたことだ。その場面で私は思わず声を上げてしまったほどだ。それだけに彼の心の傷つきようが気になつて仕方ない。紙の上では本当の自分を表現していたと思うが、それを無いものとされたのだから、私の想像できないほどの傷つきかたをしたように思う。でも伯母さんがそんなふうにするのは、ジョンをしつかりとした大人にしたからだろうし、ジョンの将来に責任を持ちたいからだろう。ただ、以前の私もそうだったように、十歳のジョンにはまだ分

からないことなのだろう。

そして何より一番は、母であるジュリアと一緒にいることが出来ないこと。つまり母親と暮らすことをだめとされていることだろう。それを自分に置き換えて考えたら気が遠くなつてしまふほどに信じられないことだ。でもなぜ二人は親子なのに一緒にいられないのか。それは彼女がとても自由で、どこが空想の中に生きているような人で、子どもの私から見ても親らしいことは出来ないだと感じる。

そんな彼女がジョンに最高の魔法の言葉を教えている。イマジジン、ジョン——その言葉一つで二人はロイヤル・アルバートホールで歌う大物歌手になつたり、鏡の向こうの国に出かけたりしている。そしてイマジジンな世界にジョンは行けるから、母がいない生活でもなんとか正気を保つことができたし、ミミ伯母さんとの生活にも耐えることができたんだと思う。

今、改めてジョン・レノンのイマジジンを聞いてみる。伴奏や歌声が壁気楼つぽいのはイマジジン（想像）の世界だからだと思う。決して強いメッセージではなく、まるで細かな雪が手のひらに降り、溶けてゆく感じがする。かすかな冷たさは後から心に染み通ってくる。私も今夜、戦火にいる人達に思いを馳せたい。

（図書名『ジョン』）

〈講評〉

好南さんのもつている心の引き出しから織り成す素敵な言葉たちが、この本の世界観やイマジジンの曲と共鳴しています。

ジョン・レノンの生い立ちや、彼を取り巻く様々な人物や環境について、十歳だった頃の自分と照らし合わせながら、物語を丁寧に読み進めています。そして繰り返し読みながら深く考えていくことで、今でもよく耳にするイマジジンの曲を、様々な意味合いを考えながら聴くことができるのでしよう。

審査を終えて

第八十二回冬休み良書推薦運動読書感想文コンクールには、県内の小学校三十六校から七十点（低学年三十九点、中学年十八点、高学年十三点）の作品が寄せられました。学年が上がるにつれて応募数は少なくなっていますが、引き続き応募をしてきている子ども達もいて、大変嬉しく思いました。

学校賞は優秀な作品を多く応募してくださった城南小学校です。前回に続き、残念ながら学級賞の該当はありませんでしたが、一校で複数の応募をしてくださった学校が多く、ご指導くださったご家族や先生方に、感謝申し上げます。

以下、審査で話題になったことをお伝えします。

【低学年】

選書が多様で、様々な本の感想文が集まりました。テーマも多様になりましたが、どの子もそれぞれ、作者が伝えたいことをしっかりと捉え、丁寧に書いていました。上手だったのは、あらすじの紹介をしながら無理なく自分の体験を盛り込んで書いていたところでした。言葉の使い方も自然で、自分らしい表現につながりました。

また、中心人物だけでなく、対人物や周囲の登場人物にも焦点を当てて書いた作品も見られました。複数の視点で多角的に読めていたのは、大変素晴らしいと思います。

全体的に、自分の思いを低学年らしく素直に書き表した作品が審査員の評価を得たと感じます。

【中学年】

段落の付け方も含めて、文章構成が上手な作品が多く見られました。題名から結末部までに一貫性があり、見通しをもって書かれていたことが分かります。一番伝えたいことを題名にし、その言葉を文中で繰り返すことで、思いを強調する効果も生まれました。本の内容を自分の生活に引き寄せて考え、これからの生き方にまで広げて書きまとめた作品が多く、感心しました。

科学的読み物の感想文からは、本との出会いによってさらに知識を広げ、読書を楽しんだ姿が伝わってきました。何よりも嬉しい姿です。

学校でも、タブレットによる学習が進み、手書きで書く機会が減ってきていますが、三枚の原稿用紙に字数いっぱい、思いが表れるような字で丁寧に書き込まれている作品が目を見守りました。

【高学年】

題名の付け方、文章構成など、読書感想文に必要な知識や技能がしっかりと身につけていて、さすがに高学年らしいと感じました。

特に上手だったのは引用の仕方、効果的に使われている作品が複数見られました。

現在の社会の課題について、考えを深く掘り下げて書いた作品も目立ち、相応しい選書の仕方がされていたことが伝わってきました。思いや考えの変容がはっきりと見える書きぶりも、見事でした。

本の内容と同じ経験や体験がなくても、読書を通して「このことだったのかもしれない」と、推測して書く力があるのも高学年ですが、体験談のみに偏らず、本のテーマを捉えて、自分の言葉で書かれた作品が入賞しました。

【終わりに】

昭和五十九年から四十一年間にわたって開催してきた本コンクールも、今回の八十二回をもって終了となります。これまで、本場に多くの素晴らしい読書感想文が寄せられ、どれもが感動を伝えてくれるものであったことに感謝いたします。

読書によって、私たちは考え方や生き方を学び、人間として大きく成長することができます。コンクールは終了となりますが、これからも、皆さんがよい本と出合い、豊かな人生を送ることができまことを願って、最後の講評とします。

審査員 杉浦 美香子

あとがきにかえて

「岩手の子どもたちに良い本に出会い読書に親しんで欲しい」との願いをこめて

― 岩手県良書推薦運動読書感想文コンクールの終了とお礼 ―

岩手県良書推進協議会 会長 大石善弘

早春の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。平素より本協議会と標記コンクールへのご理解とご協力を賜りまして誠にありがとうございます。

さて、この度「岩手県良書推薦運動読書感想文コンクール」は、本日の第八十二回コンクール表彰式をもちまして、全ての活動を終了いたします。

時代の流れの中で、社会はもとより学校をはじめとした子どもたちを取り巻きさまざまな環境は大きく変化しており、本協議会の活動及び標記コンクールも一定の役割を終えたと判断し、終了することといたしました。

本コンクールは、昭和五十九年度から令和六年度までの四十一年間、夏と冬の長期休みに年二回、開催を続けて参りました。当時の応募方法は、現在とは違い官製ハガキに直接読書感想文を書いて投函してもらう方法で、このようなことも懐かしく思い出されます。コンクールの応募数も多い時には三百点を超える事もあり、限られた時間での作品審査作業はうれしくも大変だった記憶がございます。

これまで活動してこられましたのは、ひとえに学校関係者、歴代の審査員の先生方、そしてこれまで読書感想文作品を応募していただいた児童や保護者の皆様の温かいご支援・ご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

今後は、これまで本コンクールに協賛していただいた岩手県学校生活協同組合が岩手県学校図書館協議会（岩手県SLA）の青少年読書感想文岩手県コンクールを後援する形へ移行します。これまで取り組んできた本協議会の「岩手の子どもたちに良い本に出会い読書に親しんで欲しい」との願いを継続し、その活動が盛り上がっていかれるように今後とも倍旧のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

重ねまして、これまで本協議会と標記コンクールを支えてくださった皆様、ご協力いただきました関係者の皆様に心より深く御礼申し上げます。

